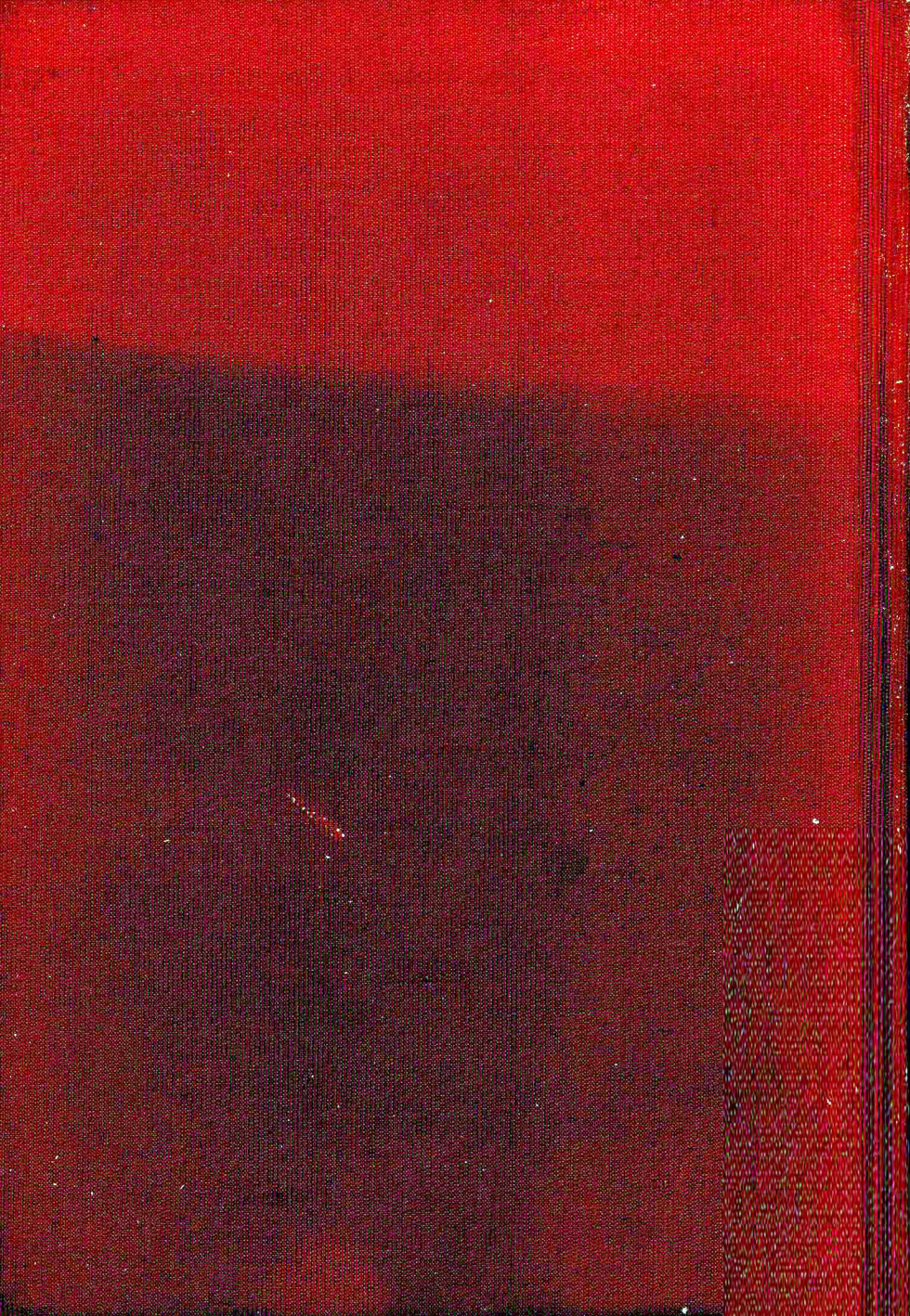




吉屋信子句集

東京美術刊

著者略歴

吉屋信子 1896 新潟に生る。
県立栃木高等女学校を卒業。
＜花物語＞以下著書多数。
＜鬼火＞により女流文学賞を受く。
俳句は、宗有爲子で（鶴）に投句、
のち虚子について勉強した。
1972.7.11 没, 77 歳

検 印 省 略

吉屋信子句集

昭和四十九年三月十五日 印刷
昭和四十九年三月三十日 発行

定価 一五〇〇円

編 者

吉屋千代

発 行 者

佐々藤雄

発 行 所

東京美術

東京都千代田区神田司町二一七
電話二九二・三二三一（大代表）
振替東京一三八六 1972 ©

印刷／東京美術第一工場
製本／土開製本株式会社

落丁・乱丁はお取替え致します



虚子先生「時として平凡陳腐で箸にも棒にもかゝらぬやうな句が出来るのであるが」
「はい、それが私の目下の句でございます」

ます
山

虚子先生「それがたまく或ものにふれると、
忽ち才氣喚発して立派な句となる」
山

「ながく喚発いたしません」
山

序

星野立子

昭和二十二年十一月六日、信子さん、父、私と共に京都、宇治山田へ旅行した。

玉藻の二百号記念俳句大会が宇治山田で催された時の事である。

この旅の思ひ出波の浮寝鳥

立子

父と私はその時選句をして、信子さんはいゝ声でテーブルスピーチをして下さった。

又二十二年二月八日には浅草に針供養を見学に鎌倉潮句会うしおで御一緒にした事もあった。

その時の信子さんの句に、

裁縫はいつも乙なり針供養

といふのである。

父が「立子へ」といふ一文の中に信子さんの事を

深秋といふことのあり人もまた

虚子

といふ俳句を贈つてゐる。

ホトトギス巻頭（昭和二十一年八月号）

浮浪児のなめて離さず甘茶杓

信子

浮浪児の俄かにはしやぐ花吹雪

同

等は誠に信子さんの才能とユーモアと個性とが溢れてゐて私は尊敬する友であつた。

皆、なつかしい思い出ばかりである。

序

中村汀女

今度、吉屋さんの句集がお出来になると伺ひ、お願いして、書きためて居られた句帳を見せていただき、私はただおどろき、恥ぢいました。これほど熱心な句作がつづいてゐたとは、私はまるで存じませんでした。

高浜虚子先生や星野立子さん方とよく句会をなさつてゐるとは聞いてゐましたが、ホトトギスへも毎月の投句、巻頭になられたこともあるのでした。

それにつけても私は申し訳ないことがあります。先年、或るホテルのロビーで吉屋さんと出逢ひました。

「汀女さん、あなたはなぜ私に風花を下さらないの」とつさのことで私はあわてて「お読み下さるのですか」と返事したのは、忙しい吉屋さんが私たちの小雑誌をほんとうに読まれるのかと思つたからでした。（実のところ、鎌倉に移られたあとは差上げるのが中断されていました）いま考へれば、同じ女性

の句を作るものとして私たちのを見やうと思はれたのでせう。有難いことであつたのです。

最初のつきあひといへる尾道市への旅、講演など私にはおこがましい気がいたしながら文芸春秋から、誘つて下さるのをうれしく出かけました。昭和十八年のことであります。「講演旅行、尾の道のあとに、稀といふ冬の海を輛の津へ渡る。古き港町の古き家並。一行吉屋信子、木村伊兵衛、小野佐世保氏、車谷編集長と」と私の句集に書いてゐますが、遙かなる彼方の日で、さすがに若いお互ひの写真が残つてゐて、そうです、その車中でも句会がありました。

近年もお目にかかるのは文壇句会、それに年に一度の銀座百点の忘年句会で、お互ひに締切時間があるものですから、袖ふれあふ程度の話しか出来ませんが、お逢ひ出来るそれだけで満足も安心もしてゐたのであります。そういう座での吉屋さんの真剣さを、私ははじめて思ひ当ります。これほどに句作にうち込んでゐられたその現はれだったのであります。

初雁にわが家月番の札掛けて

昭和十九年ホトトギスに初入選、としてありますが実に当時の暮しが描かれてゐて、とたんに彼の目に引きもどされます。

今年はやありしことども鳥総松

おひおひに別れてよりの花疲れ

雛に貸す書斎の隅はここがよし

鎌倉へはや夏帽子かぶりそめ

籠枕真昼の夢はすぐ忘れ

など、取り上げたい句がきりなくつづきます。

栃木の女学校の校庭の句碑、「秋灯机の上の幾山河」はくり返すたびに私は涙を感じます。

「句碑の字を手習ひしてもらおうと机の上に紙をひろげておいたのですが、字を書く気力はもうなくなつてゐたのですね、前にあつたものを使ひました」小康を得て退院されたときのことを語られる門馬千代さんの明るいといへる話ぶりを私は何か安心して伺つたが、永年のお二人の友情の明るさだと知らされ

ました。

「机の上の幾山河」さびしいといふほかはない吉屋さんの後姿がそこにあります。そして、これは数へきれなく残された創作の中の山河であり、句の中の山河はまた別に、あの方の別なる一面、もつとも真実なる面が一句づつにあると私には思はれてなりません。

空 見 れ ば 月 と お ん 母 ね は ん 像

二十二年「長谷大仏殿のねはん図にて」といふ付記がありますが、春四月、月とおん母の国にいま安んじて、そして門馬さんをはじめ友人たちを見てゐて下さるのだと思ふのであります。

昭和四十九年花ぐもりの日に

初暦の句など

瀧井孝作

私は、吉屋信子さんの句では、初暦の一句に、目を見張ったおぼえがあります。それで今、以前の手帖をしらべたら、昭和三十三年十二月十三日の文芸春秋の忘年会に、熱海大野屋の席上互選で私の採った句でした。

手のつかぬ月日ゆたかや初暦 吉屋信子

これは、初暦を手にして、誰もまだ知らぬ手のつかぬ新しい月日が一ぱい並んで居るといふ句で、この神秘のやうな感動はすばらしいと私は見ました。

「手のつかぬ月日」は妙味が深いのです。同じ十二月十三日の私の手帖には又、

とち糸の色わかくさや初暦 久保田万太郎

クリスマス海のたけりの夜もすがら 同

ふくよかな大きみをまだむかず 永井東門居

膝かけに日のあたりをり青みかん 東谷太子堂

この四句も書留めてあります。「とち糸の色わかくさや」は鮮やかです。「クリスマス海のたけりの」は強い句です。

文壇俳句会の互選にて私の採った句は、私の手帖に数かず書留めてあります。その一例もまた書き添へます。昭和三十五年三月四日、赤坂山の茶屋にての句会です。

あれこれと心づもりの余寒哉	久保田 万太郎
莫逆といふ名ばかりの春寒し	田村 泰次郎
何くはぬ顔して雛の並びけり	徳川 夢声
古雛は何も申すまじと並びけり	吉屋 信子
雛あられ男にさせるお手のくぼ	同
こぼれ菜の咲きし茎立ち蝶低く	中村 汀女
マツチすればマツチのよき香蝶の屋	同

悼句

年の瀬の句座に語りしこと忘れず

秋櫻子

氣に入りし芙蓉がくれの小書齋

風生

ロマンさはに渡せし虹の橋消えぬ

渋亭

星涼しけれども吉屋信子の忌

敦

底の抜けた柄杓笥に法師蟬

龍男

俳のそこに匂へり沈丁花
友二

遙かといふ言葉がすきよ春の星
晴子

炎天に金のペンおき逝きたまう
桂信子

牡丹の芽たたえしひともなかりけり
中里恒子

笑ひ声いまだに耳にすみれ草
平之助

白桔梗すずしく吉屋信子逝く
正木千冬

こゝが好きといはれしところ崖椿
大佛治子